青少年育成センターだより

第９９号　２０２０．１１．１５

防府市教育委員会生涯学習課
青少年育成センター
０８３５－２３－３０１３

「母親を　霜よけにして　寝た子かな」　　小林一茶

ふと天神山に目を向けると紅葉が美しく色づいています。いつまでもこのような綺麗な景色を見ていたいものですが、もう少しすると、霜が降り、雪が舞う季節がやってきます。そろそろ、冬支度の準備が必要です。

お母ちゃんの宝物

皆さんは、この夏休みに、いろいろな宿題をいただいていると思いますが、私の近くの中学３年生の宿題は、毎年決まっているんです。それは、お母さんから、生まれた時のことを、ずっとお聞きして、「おいたちの記」を書くというのが、その中学３年生の宿題になっているんです。ある年の中学３年の背の高い体格のいい、言うことを聞かん、やんちゃ者がいたそうです。

夏休みになった晩、

「お母さん、おいたちの記を書いていかんならんのや、僕の生まれた時のことから話しとくれ」

お母さんは黙ってお仏壇のほうへ行ったという。包みを持ってきました。黙って渡しました。

「何包んでんのや」

開いてみたら、まだ包んである。次のを開いてもまだ包んである。

「何をたいそうに包んで、包んでしとんやろうか」

開いて、開いて、開いて、開いていきましたら、最後に出てきたのが、爪だったといいます。

「何だバカらしい。爪なんか」

と言い返した時に、お母さんが、

「あんたが生まれてくれた時、どんな子が生まれても、文句をいうてくとこなかったのに、両手にちゃんと十本の指が揃っていてくれた。お母さんはうれしうてうれしうて、あんたの最初の十本の爪を、お母ちゃんの宝物にして、大事にしてきたんやで」

とおっしゃった時、その中学三年の、大柄の、いうこと聞かんやつが、

「お母ちゃん・・・」

いうてお母さんの首たまにくっついて、お膝の上にぽとぽとと涙を落としたところから、そのおいたちの記がはじまっているんだと、校長先生からお聞きしたことがあります。

いい夏休みをすごしたもんですね。宿題のおかげで、このいうこと聞かん、やんちゃな者が、お母さんによって育てられてここまできた。大柄な体でありながら、小さい自分が大きなものに祈られている、願われている、その中の自分であったということに目覚めたということでしょうね。

「自分を育てるのは自分」　著　東井義雄

いかがでしょう。本当に心に響く話ですね。この話を読むと自然と皆さんのお母さんの顔が浮かんできませんか。

皆さんも、今日子どもが帰ってきたら、子どもが生まれてきたときの喜びや感動を伝えてみませんか。名前の由来でも話してやりましょう。このような時間があると、子どもとの絆がますます深くなること請け合いですよ。お父さんも加わるといいですね。

（文責＝青少年育成センター指導委員　藤村）